

いのちの葉

日々の暮らしと、『歎異抄』

井上
見淳

目次

あの日々のおかげ	4
自分よりも大きな存在	9
お母さんのように	14
お寺に出かけてほしい	19
露わになる自分の姿とは	25
自分ならどうしただろうか	29
私を導くはたらき	34
如来さまのお慈悲に包まれて	38
一人の人間に、ひたむきに	42
善悪を超えて	46

あの日々のおかげ

幸さいわひに有う縁えんの知ち識しきによらずは、
いかでか易いぎ行ぎょうの一いち門もんに入いることを得えんや

『歎異抄』序文

新入生の姿に……

ここから以下に書き連ねました十の内容は、『歎異抄』のお言葉を通して、日々暮らしのなかで、自分なりに感じたことを記したエッセーです。

さて、まず取り上げましたのは『歎異抄』の序文です。この一節は、み教え

を伝えてくださる師（有縁の知識）の有り難さを語ったものです。

私は現在、龍谷大学に教員として奉職しています。毎年のことなのですが、みなさんは四月に新年度を迎える時、どんな気持ちになりますか。

私の場合は、新たな始まりに期待して浮き立つような明るい気持ちと、「ああ、始まってしまった」という憂鬱ゆううつな気持ち。毎年、この二つが天秤てんびんでぐらぐらししています。でも、いざ桜舞うなか、大学の入学式に座る初々ういっせいしい新入生たちを見てみると、やはり明るい気持ちになっていきますね。

あの姿を見ていると思う出すのは、かつて同じように入學式に座っていた自分のことです。大学生になってからの一、二年、私は大学が楽しくはありませんでした。なにせ親鸞聖人の教えや歴史を専門的に学ぶ「真宗学科」に入學し

ながら、その真宗学の授業があまりおもしろく感じなかったのです。

当時の思いを正直に告白しますと、講義されている内容はそれなりに理解できのですがピンとこない、話が退屈に感じる。「仏」や「浄土」を受け止めきれず、その説明も少しずつ違って聞こえて、矛盾や曖昧さばかり感じる。挙げ句の果てに、意を決して質問に行けば「質問が間違っているね」と返されたこともあり、まるで途方に暮れていました。

いま思えば、こういう状況に陥っていた主たる要因は、私の学びや経験の不足、生来の生意気さからくる真宗学に対する謙虚さの欠如などにあったと思います。

しかし当時の私は闇の中にいました。

師との出会い

そんな中、私が三年生から所属したゼミの先生は違っていました。非常に論理的で明快であり、何かを論じる時にはいつも必ず根拠を出すように厳しく指導してくださいました。

例えばこんなやりとりです。

「浄土真宗って信心正因しんじんしょういんですよ。だから、その……」と質問した私に対し、先生は「信心正因しんじんしょういんってどこに書いてあるの」と逆質問。「え、違うんですか」とビビる私に、先生は笑いながら「いや、違うとは言っていない。信心が往生の正因だとお聖教しんぎょうにあるからそう言われるわけやろ。例えばここにね」と、お聖教をめぐって何カ所も根拠を教えてください、丁寧に説明していかれるのです。